



1. 暴言・暴力



暴言・暴力は、老人福祉施設などで働くケアワーカーにとって最も対応に苦慮する問題の一つです。老人福祉施設に入所する認知症高齢者のうち約1割が、暴力を振るったり暴言を吐いたりするという報告もあり、暴言・暴力の頻度は小さくありません。ケアワーカーと他の高齢者は、認知症高齢者の暴言・暴力により、怪我をしたり、恐怖を感じたり、悲しい思いをする危険にさらされています。さらに、ケアワーカーは、施設内で発生する暴言・暴力により高齢者が被害を受けることを防ぐために大きなエネルギーを割いています。

暴言・暴力の発生には、施設で生活する中での、人間関係や集団生活のストレスが関係している場合があるかもしれません。しかし、それだけでは多くの発生を説明することはできません。たいていの暴言・暴力の背景には、認知症そのものがあります。

認知症の高齢者の多くは、普通の生活の中で身の回りに起こるちょっとした変化の意味を把握することが苦手になります。また、身辺のことが自分の思ったように出来ないために、イライラしたり自尊心が傷つきやすくなっている人もいます。このため、着替えや入浴、トイレ介助など身辺のお世話をする時に、暴言・暴力が起こりやすくなります。暴言・暴力は、認知症の人が思いを伝える一つの表現方法であると理解することも大切です。

暴言・暴力が出現する状況において、何か共通するきっかけが見つければ、対応が容易になる場合もあります。健康な人からみればささいな事がきっかけになっているのかもしれません。ケアワーカーが提供しているケア自体の中にそのきっかけがある場合もあるかもしれません。

しかし何のきっかけもなく暴言・暴力が出現する場合もあります。認知症による性格変化や、気持ちや行動の抑制がとれてしまうことなどが原因です。こうした場合、暴力を予見することは困難です。また暴言・暴力のきっかけが判っても、全てを防げるものではありません。ケアワーカーが、自分が提供したケアを省みることは大切なことですが、過剰に反省することは禁物です。病気のために起こっている問題なので、高齢者に責任をとってもらうことは難しいことかもしれませんが、だからといってケアワーカーが全ての責任を背負い込む必要はありません。

認知症のケアにおいて、暴言・暴力は常に起こる事です。経験が少ないケアワーカーは驚き・恐怖を感じますが、経験を重ねるうちに暴言・暴力に慣れていき上手く対応出来るようになります。しかし「自分が暴言・暴力を受けるのは仕方ない」と思うようになることはありません。認知症のためであっても、高齢者の暴言・暴力が他の高齢者やケアワーカーに向かうことは本来あってはならないことです。しかし暴言・暴力の問題は、ケアを尽くしても、完全には防ぎきれないところに、この問題の難しさがあります。



1) 暴言・暴力の治療

認知症が原因でおこる暴言・暴力は、専門医による治療が選択肢となります。近年、罹患者が増えているアルツハイマー病やレビー小体病では、暴言・暴力が起こりやすいことがわかっており、治療法の研究が進んでいます。アリセプトや非定型向精神薬が治療に使われるようになっていきます。また、抗てんかん薬は、気分の波を小さくすることで、暴言・暴力の発生を抑える効果が期待できます。暴言・暴力の中には、せん妄(寝ぼけた状態)が原因となっている場合もあります。せん妄は、睡眠導入剤などを用いた治療を行う事で改善が見込まれます。

薬物療法によっても、暴言・暴力が完全に治らない場合もあります。認知症の記憶力の低下が治しきれないのと同様です。しかし、薬物療法には、暴言・暴力の程度を軽く出来る可能性は小さくありません。暴言・暴力の治療の目的は、当事者の苦痛を改善することだけではなく、他の入所者やケアワーカーの被害を予防・軽減することにあります。

薬物療法には副作用があります。筋弛緩作用のために体に力が入りにくくなり、姿勢を維持しにくくなったり、転倒する危険が高まったりすることがあります。飲み込みが悪くなったり、呂律がまわらなくなったり、失禁しがちになることもあります。また、日中眠りがちになって、昼夜の区別がつかなくなる状態になってしまうこともあります。薬の量の調整は、副作用と主作用とのバランスをとりながら行われます。副作用が出現したらその情報を医師に伝えることが大切になります。

2) 暴言・暴力が起こった時の対応

Step1 あなたや他の入所者の安全を確保しましょう。

高齢者による暴言・暴力が生じる時、最も大切なことは、暴言・暴力を向けられたスタッフや、他の入所者の安全を確保することです。暴言・暴力が突然で防ぎ切れない場合には、こうむる害を可能な限り小さくします。

安全確保

暴言・暴力があなたに向けられた時は、距離感を保つようにしましょう。暴力の場合、物理的距離感が大切です。一定の距離を保っていれば、小さな暴力からうまく逃れることができる場合も多いでしょう。ケアワーカーとして経験を積めば、暴力が起こる瞬間を察知できることもあるので、暴力をまともに受けることは少なくなります。

その場から逃げる時には、気持ちを落ち着け、できる限り静かに行動することが大切です。暴力に対するあなたの声や動きが、高齢者を刺激し興奮を引き起こし、さらなる暴力に繋がってしまう可能性があります。あなたに暴言だけが向けられている時は、精神的な距離感が大切です。静かに対応する事が大切なのは、暴力と同じです。

高齢者が、あなたをつねったり髪の毛を引っ張ったりする場合には、その高齢者から離れるよりも、むしろ近づいた方が、被害を小さくする場合があります。慌てて高齢者から離れると、痛みが大きくなり髪の毛が抜けてしまうことがありますし、高齢者には転倒の危険が生じます。

一人では対処しきれない暴言・暴力には、他のスタッフの助けを求めましょう。

高齢者の暴言・暴力が他の入所者に向けられた時には、暴力を振るった人と、他の入所者を引き離しましょう。

Step2 暴言・暴力の起きた原因を探りましょう。

安全が確保されたら、暴言・暴力が起こった原因を探りましょう。キッカケとなった原因がわかれば暴言・暴力への対処が容易になるかもしれません。キッカケとなるものは、その人が不快と感じるもので、入浴やオムツの交換のような具体的なものから、フロアのザワツキのような雰囲気の場合もあります。また、誰かが体に触れた場合のような理解可能な理由のあるときもありますが、他の人には理解出来ない、その人独自の不快なものが原因となっている場合もあります。

原因はなんだろう？



暴言・暴力の理由を探る一つの方法は、「どうしたんですか」とお年寄り自身にたずねてみることです。暴言・暴力があなたに向けられた後、安全が確保されれば、落ち着いてたずねてやすくなるでしょう。お年寄りは答えてくれないときには、あなた自身で原因を探りましょう。同僚の経験にヒントがある場合もあります。

どうしたんですか？



Step3 冷静な口調で改めてほしい点を伝えましょう。

高齢者から暴力を受けない距離をとり、あなたの気持ちが落ち着いたら、暴力を振るった人に改めて欲しい点を伝えましょう。例えば次のように言うと良いでしょう。

叩かれたり、引っ掻かれた場合：「痛いので止めて下さい」
オムツや汚物を体につけられた場合：「汚いので止めて下さい」



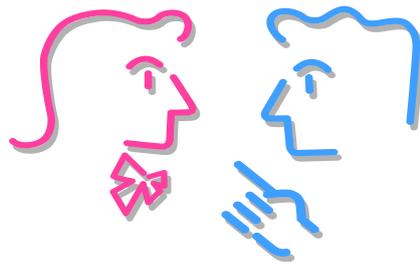
痛いので止めて下さい

高齢者が暴力を起こした時に、その問題点を高齢者に伝えることは、大切なことです。認知症のために、しばらくするとあなたが伝えたことを忘れてしまう人でも、暴力を起こしたその時、その時に、その人の中に保たれている脳の健康な部分に向かい合うことは、その人の人権を尊重することになります。また、このように正面から向かい合うことで暴力や暴言が収まっていく場合があります。

あなたの「止めて欲しい」というメッセージがうまく伝わらない時には、同僚に伝えてもらうのも一つの方法です。お年寄りとケアワーカーに相性のよいものがある場合、同じ言い方でも、メッセージの伝わりやすい同僚がいる場合があります。

Step4 暴力を受けたことを他のスタッフに伝えましょう。

暴力を受けたら、フロアの上司に伝え、同僚と体験と情報を共有しましょう。上司に伝える際には、誰から、どういう状況で、どういう暴力を受けたのか、ケガの程度など、具体的に伝えることが大切です。



体験と情報の共有

出血や内出血、骨折、抜毛が起こった場合には、上司から、当人に注意するか、家族に事実を伝えます。

Step5 暴力への対応を他のスタッフと相談しましょう。

暴言・暴力は、あなただけではなく、他のスタッフや入所者にも起こりうることです。あなたの経験をヒントに、他の職員と暴言・暴力への対応方法を考えましょう。

上司により、暴言・暴力が認知症に起因するもので、ケアの工夫だけでは対応しきれない、という判断が下されたら精神科への受診に結びつけます。